

## IT時代こそ人間関係の尊重を (退官後10年目を迎えるに当たっての雑感)



平田 智明

課長在職期間 平成 1.8.1～平成 3.7.1

艦船技術会再発足以来30周年を迎えることとなり、益々盛会の由、心からお慶び申し上げます。

それに先立ち、今回の特別号への寄稿依頼を受け、どうしたものかと思案の挙げ句、私も退職以来2002年で10年目を迎えることとなるので、この機会に自分の在任時代を一通り振り返って見るのも意義あるものと思い、思いつくまま思い出を追って見たいと思う。

私の入隊は昭和37年3月28日であった。当時学卒の就職は好景気に恵まれ、民間企業では殆ど無試験で、夏期実習中にほぼ決定するという時期であった。私が海上自衛隊に入隊した動機は、一応採用試験(論文、面接、身体検査)があり、クラス中で唯一の試験による入社決定者であったこととともに造船学の専攻であったことよりも、第1回の貸費学生で昭和36年当時、4500円/月の貸費を受けており返還するのが大変だったことが主因であった。

当時の4500円×24か月分約10万円と言えば大卒の初任給の半年分に相当するもので、入隊辞退となればそれを一括返金しなければならず大変なことであったので、止むなく入隊したものであった。

入隊してからは、江田島での訓練、卒業後は国内巡航、遠洋航海と自分には全く不向きな事ばかりさせられたように思う。造船屋は船を造るのであって、乗るわけではないので船に乗ることになるとは思ってもみなかったが、これがまた大の苦手で、体質的にも精神的にも合わず、動揺計の針が動くかどうかのときには、既に自分の顔は真っ青で、敏感な動揺計代わりに利用されたものである。従って、今後は艦船を造っても決して乗るまいという決心でいたが、その後は魚雷艇の能力試験、護衛艦の荒天時の航洋試験、補給艦の能力試験等委員として乗せられることになった時は、何と不幸な人間と思わざるを得なかった。その後任地を幾つか経験したが、在任中の任地は大湊4回(雪印がついていた?)、舞鶴1回、長崎2回、大阪1回、横浜1回、で後は東京14年間1回と3年半1回であった。これら31年間を振り返って思い出等を書いてみたいと思う。

昭和39年6月SRF実習を修了し、いよいよ晴れの初任地へその内示を受けたのは、実習も終わりに近づいた一週間前だったと思うが、7名の新任技術幹部のうち、よりもよって

私1人が本州最北端の地大湊へと決まった。当時の指導官に恨み、つらみを申し立てたが変わる事無く、諦めきれなかったが泣き泣き大湊に赴任した。これがそれ以降のつまづきのもと(?)か大湊勤務が4回となったものである。しかし、ここでは上司に恵まれ、生活環境にも恵まれ公私共に大変楽しく北国生活を味わうことが出来た。何分にも当時の大湊は若い青年士官は皆無に等しく大いにもてたものであった。(但しお金がなくては駄目)当時の初任3尉は給料も安いので借金する前に北国から抜け出すため、部外研修(大学院研修)のための受験勉強準備期間として約6か月防衛大学校に入校した。無事入試には合格したので原隊復帰、その秋に結婚、心身共に安定期にはいった。翌年の4月から大阪大学大学院にて2年間学生生活に入った。大阪での学生生活は関西本線沿線の柏原にある共済住宅(6畳一間、一畳の台所で給料の約1/3の家賃)で親子3人の慎ましやかな新婚生活であった。大学卒業後4年間のブランクと授業内容の高度化で復習、予習、子供の夜泣きに大変苦労したが、充実した楽しい時期でもあった。

その当時は各大学では、自衛官入学反対の真っ盛りの時代で、学内の食堂と言わず構内中ビラが貼られており、決して制服を着ることなく民間人として行動したので、折角培った海上自衛官としての塩付けが抜けてしまったのではないかと心配であった。しかし、その2年間もあつと言う間に過ぎ、再び任地へ、今度はまた寒冷地の舞鶴であった。

舞鶴は寒冷地といっても大湊のような表日本的寒冷地と異なり、裏日本的気候で雪の質が全く違いじめじめとした粘っこい雪である。「毎日弁当は忘れても傘だけは忘れるな」と言われるほど、天気も気まぐれであった。

しかし、仕事面においては、私にとって一生を大きく左右する上司と出会うこととなり忘れられない思い出の地である。この上司は仕事面では非常に厳しく、良く罵られたり、馬鹿呼ばわりされた。また昼休みでさえ遊びで(コントラクトブリッジ)は新聞を丸めてこづかれ仕込まれたものである。夜は夜で酒の飲み方の指導を受けた。当時は私も若く悉く反発したものであったが、反発すればするほどより厳しく、しごきがいがあるようであった。

その間約2年半しごかれたお陰で何となく仕事にも少し自信をもてるようになり、その後の勤務においては大いに役立ち、在任中の精神的な支えとなったことは忘れられない思い出であり心から感謝の気持ちでいっぱいである。

こういった経験から、これからの若い諸君も厳しく叱ってくれる先輩を大切に、指導についていく努力を重ねることが大切だと思う。

また、「YES MAN」でなく疑問を抱くこと、反発することも大切で、そのためには、それなりの勉強と努力が必要である。

私の一生は人との出会いで始まりそれが自分を育て、今なお生きつづけていると思うものである。

この他、舞鶴以外の勤務で多くの上司に仕えたが、技術的知識は勿論、管理、仕事のやり方、人の使い方等それぞれ学ぶべき点が多く、その様な先輩、上司に仕えることが出来たことはこのうえなく幸せであった。

次に、現役在任中の特に記憶に残っているトピックス的担当業務について列記し思い出を

述べてみたい。

- 護衛艦の入港時、岸壁に激突した損傷事故の復旧工事の現地調査、応急工事、回航後の復旧工事（S44年 舞造所）
- 護衛艦と潜水艦の航行中の接触事故の復旧工事での護衛艦の舵支材の現場での曲がりなおし（S45年 舞造所・大造所）
- 大湊ドックのドライアップ作業、渠底のヘドロの搬出作業、戦後初の第1船の入渠等の計画、指揮（S46年 大造所船体科長）
- 三菱長崎造船所における「工場等における現場のマネジメントの研修第1回研修生（S47年 三菱重工長崎造船所研修）
- DDH（ひえい）、LST（みうら）、DDH（しらね）、の建造の検査、監督官（S48～S50年 横浜駐在官事務所）
- LST（みうら）型へのフィンスタビライザー装備の必要性についての検討、検討結果の海幕及び技本への進言（S49～51年 横浜駐在官事務所・海幕艦船課）
- ポスト4次防艦船の計画業務（S50年 海幕艦船課）
- DDH（しらね）型装備のフィンスタビライザーの機種選定（S51年 海幕艦船課）
- 53DDG、54DD、54DEの計画、設計のとりまとめ（S53年 技本主設付）
- 定期検査、年次検査実施要領の第1回制定作業（S58年 海幕艦船課艦船班）
- ガスタービン整備要員の整備（S58～60年 海幕艦船課艦船班長）
- 大湊ドックにおける護衛艦の年次修理の実施、そのためのドック周辺設備の整備（H01年 大造所長）
- 03DDの主機選定作業（H02～03年 海幕艦船課）
- 05LSTの基本計画、基本設計取りまとめ（H04～05年 技本副開発官）

以上のように、私は上司、先輩に恵まれたと同時に仕事にも恵まれ、各任地で1つはなかなか通常では経験できないような特異な業務を経験させていただいた。列記した業務の一つ一つにいろいろな思い出があるが、特に記憶に残っているのは、地方のどさ回りも終わり漸く東京近辺の横浜勤務となったS48～50年の間、当時調本横浜駐在官事務所勤務で、輸送艦「みうら」の検査・監督官であったころ、輸送艦「みうら」の公試に乗艦し、その揺れ方が異常に大きく不信に思ったので、忘れていた復原性能の勉強をし直し、輸送艦「みうら」の動的復原性能のチェックをしたところ、動的復原力が異常に小さいことが判り、当時の上司の班長、事務所長を説得し、海幕、技本に復原性能の再検討を申し入れたことである。

当時の海幕、技本はなかなか立场上受け入れて貰えなかったが、所長の熱心な説得により、水槽試験によって検証することとなり、結局は動的復原性能の予測が過小評価されていたことが判明し、輸送艦「みうら」型にビルジキールが就役後装備されることとなった。私のように船酔いに弱い者が何十回と公試に乗艦し体で感じた動揺の不自然さが気付かせるものになったものと考え「災い転じて福となす」の諺を思い出した。

もう一つ印象深いのは、護衛艦と潜水艦の接触事故による護衛艦の舵支材の曲がりを入渠中に艦をがっちり固定し、舵支材を耐火煉瓦で囲み、中にガスバーナを入れ高温に熱し、油圧ジャッキで押し曲がりを見直し直していくという大工事を担当させていただいた。勿論上司、造船所の先輩の方々の良き指導を得てなし遂げたときは、技術者冥利に尽きるとはこの事だと実感したものである。

以上述べた2件については、実際に苦労しながら、上司、先輩方の指導をいただきながらなし遂げたことでもあり、今もって忘れることが出来ない思い出である。

拙い経験ではあるが、これからの若い技術幹部の方々には次のことを申し上げたい。

「我々海上自衛隊の技術幹部は、学者でもなく、研究者でもなく、発明家でもない。とにかく自分の目で見、自分の頭で考え、自分の手、足、体を動かし自ら技術を体得すること。それによって始めて自分の身につくものであること」を念頭に置き、人との出会いを大切に、肥やしとして精進してもらいたいと思うものである。

このIT時代と言われ先端技術のみが注目を浴びている現在、古臭いと思われるかもしれないが、人である以上全て機械を相手に全てが解決できるとは思えない。やはり産業の基盤となっている1つ1つの技術は欠くべからざるものであり、近い将来、ITでは解決出来ない人間性の重視、自然の重視の時代が必ず戻ってくるものと信じて疑わない。

長々と思いつくまま書いてきましたが、艦船技術会再発足30周年を迎え、益々世の中の進歩が早く、現役諸官におかれましては大変な時期に勤務されますが、どうか健康には留意され艦船技術の発展のために頑張っていけますよう祈念しております。

(終)

艦船技術会会報(平成13年4月第32号)から